

チライの里。 道東で イトウの将来を 考える。

北海道イトウ保護フォーラム 2004 イン あっけし

とき 2004年11月21日(日曜日) 午前10時～午後1時

ところ ネイバル厚岸・道立厚岸少年自然の家

主催 イトウ保護連絡協議会

釧路自然保護協会／猿払村商工会青年部／斜里川を考える会／朱鞠内湖淡水漁業協同組合／尻別川の未来を考える オビラメの会／ソラブチ・イトウの会／別寒辺牛川のイトウを守る会／別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会

主管 別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会

厚岸自然を守る会／ウォルトンズクラブあっけし



北海道イトウ保護フォーラム2004 イン あっけし

◆開催の目的

別寒辺牛川——。ラムサール条約登録湿地・別寒辺牛湿原（北海道厚岸町）を潤し、厚岸湖を好漁場たらしめているこの川は、わたしたちが愛してやまないイトウたちの聖域でもあります。一昨年、この川にとって初めてのダムが人知れず建設されていたことが発覚すると、各地でイトウ保護を求める声が沸き上がり、ダムはイトウたちのために再改修されることになりました。別寒辺牛川の自然環境をイトウが守ったのです。しかしいっぽう、道東のほかの河川では、イトウ生息地の環境は悪化の一途をたどっていると言わざるをえません。別寒辺牛川ダム問題の教訓とは何でしょうか。「チライ（＝イトウを呼ぶときのアイヌ語）の里」とも呼べるかつての道東一帯の豊かな水域環境を、わたしたちはどうすれば再び取り戻すことができるでしょうか。過去、現在、そして将来を見通しながら、わたしたちが今とるべき針路を探ります。

◆プログラム

開会あいさつ

第1部 イトウ座談会「むかし、イトウが『幻の魚』ではなかったころ」
出演 山代昭三（別寒辺牛川のイトウを守る会）、草島清作（尻別川の未来を考える オビラメの会） 司会 平田剛士（フリーランス記者）

第2部 パネルディスカッション「道東のイトウの未来」

話題提供

平田剛士「矢白別演習場内のダム事業」

石沢元勝（別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会）

「砂防ダムと酪農とイトウ保護」

川村洋司（北海道立水産孵化場）

「『矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等検討委員会』での議論から」

小宮山英重（野生鮭研究所）

「別寒辺牛川ダム問題の教訓とは？」

パネルディスカッション

パネリスト 石沢元勝／川村洋司／草島清作／小宮山英重／平田剛士／山代昭三（あいうえお順）

コーディネーター

江戸謙顕（学術振興会科学技術特別研究員、イトウ保護連絡協議会事務局）

閉会あいさつ



イトウの保護を願う

山代昭三

イトウはサケ科イトウ属の一種で、現在日本では北海道のみにしか生息しませんが、その資源の減少は急激で、「幻の魚」の代名詞も使えないほど少なくなってきました。



やましろう しょうぞう 1928年、当麻町生まれ。北海道教育大名譽教授。「別寒辺牛川のイトウを守る会」代表。釧路市在住。

その原因を考えてみるに、イトウ自身の生態によるものと、生息環境の変化によるもの、この二つが複合して作用しているものと思われます。

まず生態によるものは、イトウの寿命がほかの淡水魚に比べ非常に長いことです。産卵可能な年齢に達するのに6～8年近くもかかり、成熟に至るまでのこの長年月の間に、もう一つの要因である外部の環境変化の影響を受けることになるわけです。

イトウは見かけによらずたいへん神経質な魚です。水量や餌生物などの変化にも敏感に反応し、ストレスを受けやすいのです。今までの自然環境と人為的影響の変化が、その生態を脅かしてきました。

私もかつて、人工授精によるイトウ養殖を試みましたが、受精率、孵化率が悪く、結果的には、やはり天然親魚の交配を願うようになりました。

そのためには、生息地の保護を積極的に行なわねばなりません。この別寒辺牛川水系は、イトウに残された重要な生息河川の一つです。自然が開発され、森林伐採、草地開発、河川改修、ダム築造などの色々な人工的なものを行なわれれば、生態系は確実に崩れ、やがてイトウは絶滅に追いやられます。

イトウは水産業の対象ではないため漁業法が適用されず、皮肉にも乱獲されやすいわけです。環境省・北海道ともにレッドリストに記載していながら、積極的な保護対策が足りないようにも思われます。せめて産卵期の4月前後を禁漁期として、法の設定をなしてほしいものです。

イトウの復活は、自然再生の証しでもあります。いつまでも「伝説の魚」のままにしておきたくはありません。われわれは互いに協力しながら、イトウとの関わりを子々孫々まで持ち続けたいものです。

イトウ座談会

山代昭三×草島清作

むかし、イトウが「幻の魚」でなかったころ

21年ぶりのイトウ座談会

草島清作

1983年4月19日。札幌の「石狩会館」において、財団法人「淡水魚保護協会」（大阪市北区）主催による世界で初めての専門家による「イトウ座談会」が開催されました。イトウ釣り師として招かれた私は、その席上、山代昭三先生、川村洋司先生と初めてお会いしたのです。あれから早くも21年が過ぎ去りました。

過年、防衛施設庁により、別寒辺牛川水系に砂防ダム建設が密かに進められていることが報道されましたが、そのダムに異議を申し立て、環境保護・イトウ保護を訴える運動の先頭に山代先生が立たれているのを拝見し、「座談会」の当時を懐かしく思い出しました。いま私は地元で「尻別川の未来を考える オビラメの会」の会長として、尻別川のイトウ保護に取り組んでおりますが、21年前のあの座談会によって私のイトウへの思いがいっそう深くなり、現在の私があるのだと思っております。

今般、図らずもこの「北海道イトウ保護フォーラム2004インあつけし」が道東・厚岸町で開催されることとなり、山代先生とも再会できることになりました。その喜びはひとしおで、老いた私の胸も期待にときめいております。

別寒辺牛川砂防ダム事業にはひごろ心を痛めておりましたが、この夏の報道で矢白別演習場ダム2基の建設が凍結されたと記載されていたので、ほっと胸をなで下ろしたところでした。

しかし油断はできません。いつ「凍結」が解除されるか分からないのであります。今回のイトウ保護フォーラムでまた、お互いの結束を一段と固め、イトウ保護に尽力いたしましょう。

今回のフォーラムに出席の機会をいただいたことに感謝します。

photo Hirata Tsuyoshi



くさじま せいさく 1929年、東俱知安村（現在の京極町）生まれ。自己記録は57年に仕留めた1メートル53センチ。「尻別川の未来を考える オビラメの会」会長。俱知安町在住。

矢白別演習場内のダム事業

フリーランス記者 平田剛士



photo Kimura Satoru

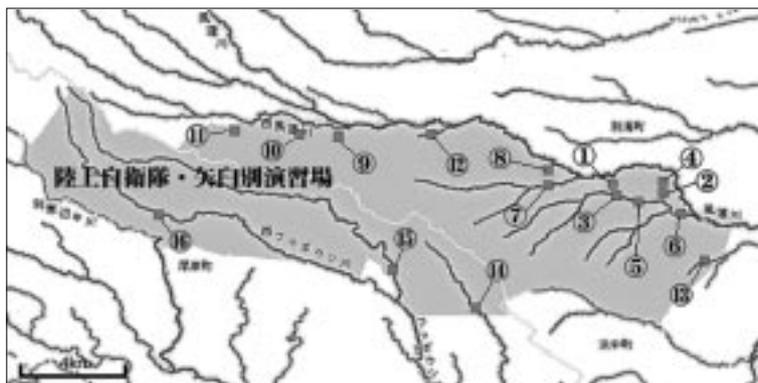
ひらた つよし 1964年、広島市生まれ。地方紙記者を経て91年からフリーランス。「オピラメの会」会員。イトウ保護連絡協議会メーリングリスト管理人。滝川市在住。

矢白別演習場は、道東の別海町・浜中町・厚岸町にまたがる全国最大の自衛隊用地だ。一帯は緩やかな台地が水流に浸食されて起伏に富む。そんな複雑な傾斜に律儀に従いながら蛇行しているのが風蓮川と別寒辺牛川で、いずれも主な水源を演習場内に頼っている。

1980年代、風蓮川の演習場内の各支流で砂防ダム建設が始まった。危険でうるさい自衛隊演習場を抱える自治体は、政府からいわば「迷惑料」として特別の財政支援を受けている。防衛施設庁が場内での建設工事を地元自治体に委託するのはその一環で、風蓮川砂防ダム事業もこの形態で進んでいる。別海町役場の資料によれば、これまで21億円あまりをかけて計12基のダムを完

成させ、現在は新しい13基目を建設している(下表)。さらに6基加えて、最終的には全19基のダム群とする計画だ。

いっぽう別寒辺牛川の砂防ダムは、同演習場を沖縄駐留米軍海兵隊が利用し出したことをきっかけに98年、厚岸町に対して最初のダム工事委託が行なわれている。



	水系	ダム名	高さ	幅	発注年度	工費	備考
1	風蓮川	廠舎周辺第3号砂防ダム	7.5	52.5	1986	約1億600万円	既設
2		廠舎周辺第2号砂防ダム	9.5	28.5	1987	約5400万円	既設
3		試験ダム	4.16	28.14	1987	約1700万円	既設
4		廠舎周辺第6号砂防ダム	6.7	42	1990	約5900万円	既設
5		白鳥川第4号砂防ダム	7.6	111	1988	約1億9100万円	既設
6		白鳥川第2号砂防ダム	9	140	1990	約3億3300万円	既設
7		玉川第1号砂防ダム	8.1	129	1990	約3億100万円	既設
8		楓沢第2号砂防ダム	7.5	93	1993	約1億8600万円	既設
9		西風蓮川第2号砂防ダム	9	77	1996	約2億1800万円	既設
10		西風蓮川第7号砂防ダム	7	102	1998	約2億8400万円	既設
11		西風蓮川第13号砂防ダム	5.7	113	2000	約1億7900万円	既設
12		樺沢第2号砂防ダム	6.2	103	2002	約1億8100万円	既設
13		熊川第1号砂防ダム	5.6	107	2002		建設中
14	別寒辺牛川	トライベツ川砂防ダム	7.1	218	1998	約6億円	既設・改良方針
15		フッポウシ川砂防ダム	4.3	182	2001(予定)	約7億円	中止
16		西フッポウシ川砂防ダム	4.5	290	2003(予定)	約10億円	中止

高さ・幅の単位はメートル。別海町資料、「児玉健次衆議院議員の質問主意書に対する政府答弁」などを元に作図。

砂防ダムと酪農とイトウ保護

別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会会長 石沢元勝

いしざわ もとかつ 1949年、厚岸町生まれ。酪農家。「厚岸自然を守る会」代表、「別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会」会長。厚岸町在住。



photo Hirata Tsuyoshi

自衛隊・矢白別演習場内の別寒辺牛川に作られた巨大な砂防ダムが、イトウの遡上の妨げになり、また、土砂が産卵床を埋めるなどの害があり、イトウの繁殖には極めてよくないものであることが明らかになっている。

影響はイトウにだけ及ぶのではない。イトウは、淡水魚のシンボルとして扱われているだけで、砂防ダムがほかの多くの魚類の生息にも悪い影響を与えていることは間違いない。別寒辺牛川には、ほかの河川に比べれば、太古のままの自然がはるかに多く残されており、この川に人工構造物は似つかわしくない。すみやかに解体・撤去されるべきだと考えるのは当然のことで、私たち「別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会」は、ダム問題が発覚して以降、一貫してそのように主張してきた。

とはいえ、この別寒辺牛川でイトウを脅かしているのは砂防ダムだけ、と言ってしまって

は、本当のイトウ保護は成功しないとも思う。

私は厚岸町内で親牛・子牛合わせて約70頭の牛を飼い、酪農で生計を立てているが、その酪農家の農地から流れ出す土砂が河川を埋め尽くしてきている、という話のある研究者から聞かされ、たいへんショックを受けた。モラルの欠如した酪農家が垂れ流しにする糞尿が河川水を汚染している問題は、すでに指摘されて久しいが、土砂による河川環境の破壊にはうかつにも気がつかなかった。これは大変なことだ。

もしかすると、根釧地方の多くの川からイトウが姿を消したのは、この地帯の大規模な酪農業が原因ではなかったのか――？

酪農を生業とする一人として、これはまさに自分の問題である。砂防ダムの課題とともに、この別寒辺牛川で解決に向けて取り組んでゆくべきイトウ保護問題だと思っている。



初夏の別寒辺牛川 photo Hirata Tsuyoshi

「矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等 検討委員会」での議論から

北海道立水産孵化場 川村洋司

かわむら ひろし 1950年、東京生まれ。北海道立水産孵化場病理環境部主任研究員。矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等検討委員会委員。オビラメの会会員。



photo Hirata Tsuyoshi

今から思えばダム建設の唯一の理由とおぼしき、演習場から流出する土砂による漁業への影響の軽減について、地元の厚岸町漁業協同組合から第三者機関による再検討とダム建設の一時凍結要請が出され、その後の流れはほぼ決まったと言えるのかもしれない。

平成14年12月15日付けの北海道新聞朝刊にて、トライベツダムの存在と残る2河川へのダムの建設計画が明らかになると直ぐ、地元「別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会」を始めとする数多くの団体から反対の意見表明が出され、さらには前記した厚岸漁協からの要請を受けて急遽「矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流失対策等検討委員会」は組織された。1回目の検討委員会が同年4月25日に開催され、現在までに5回の委員会が開催されている。

5回の議論に基づき、検討委員会は平成16年7月6日に中間報告として、「生物の生息環境に配慮した既設ダムの改修と、計画中のダムについては土砂生産源対策を含めた新たな対策工法の検討の必要性」を指摘した。議論の中心はイトウの生息や漁業への影響もさることながら、それ以前の問題としてダムの必要性について集中したといっても過言ではない。そもそも、矢白別演習場周辺域一帯に広がる湿原を抱えた落差の乏しい別寒辺牛川流域において、なぜダムが必要なのか理解しにくいと言うのが、私を含めて大方の委員の当初からの疑問であったと思う。その疑問は、演習場の上空からのへりでの視察を通じて多くの委員の確信に変わったと言っても良い印象を受けた。

流域での土砂の生産量はどのくらいか？

米軍の演習開始以来荒廃地はどのくらい増加したのか？

土砂の粒度組成は？

湿原での土砂のバッファ効果はどのくらいか？

イトウを含めた生物への影響は？

こうした疑問点に精査を加える過程で、当該地域の土砂流出対策としてダム建設が不相当であることが次第に明らかになり、前記した中間報告となった。この中間報告は主としてダム建設の必要性や適切性の議論によって導き出されたものであり、ダムの下流への影響と言う点においてはあまり多くの検討がなされたとは言えない。せいぜいトライベツダムの現況におけるイトウの再生産への影響調査に留まっている。それとて完成から日が浅く、土砂も堆積途上で未だ落差は1m未満とあって、予測の検討は難しい面を持っている。

検討委員会での議論を簡単に紹介するとともに、主としてイトウに関する影響調査の結果を報告して問題提起をしたいと思う。

別寒辺牛川ダム問題の教訓とは？

野生鮭研究所 小宮山英重

こみやま えいしげ 1949年、東京生まれ。69年北海道に移住。札幌市豊平川さけ科学館、標津サーモン科学館勤務を経て、2002年から標津町で野生鮭研究所主宰。近い将来の夢は、「できる範囲内での自給自足」生活。別海町在住。



photo Hirata Tsuyoshi

「別寒辺牛川にダム」の記事を見たときは驚いた。絶滅危惧種イトウの道東における聖域となり続けるはずだった自衛隊演習地内の川にすでにダムが1基建設され、さらに2基の設置が計画されているという。多くの方が同じ衝撃を味わったことは、その後ダム計画が中止され、既設のダムがイトウの生息環境に悪影響とならない方策が検討されていることに表れている。

1970年代前半まで道東の川に普通にいた魚だったイトウは、さまざまな人間活動により1990年代以降絶滅する方向に向かっている。長寿で、川の上流から下流まで広く生活域として利用し生きている「川の主」イトウは、現在の道東の多くの川で「親イトウはいるが子イトウは育たない」状況に追い込まれている。

イトウが絶滅に向かう原因は、森林伐採、農業開発、河川改修（河道の直線化、ダムの設置）など多岐にわたっている。特に根室・釧路管内では酪農の規模拡大とイトウの生息数は逆の相関関係にあり、事業結果の検証を行わない「やりっぱなしでかつやり過ぎた事業」と「微生物の役割を無視した産業や生活」にイトウの数の減少の原因を集約することができる。

次世代に引き継ぐ「自然環境」という財産を今の大人ができる最善の形で受け渡すには、別寒辺牛川で問われたダム問題を解決する方法に学び、各分野の専門家が公開の場で最新の情報に基づいた知恵を出し合える検証システムを各地に広げることしかないとは私は信じている。



2004年7月6日、厚岸町で開催された検討委員会のもよう。photo Hirata Tsuyoshi

イトウ保護のための宣言

イトウ保護連絡協議会

2002年10月13日、「北海道イトウ保護フォーラム2002 in ニセコ」会場で宣言

1. イトウ保護連絡協議会は、北海道のイトウが今まさに激減し絶滅の危険にさらされていることを認識し、イトウを絶滅させることなく次世代へと伝えていくために、積極的に保護活動をおこないます。
2. イトウ保護連絡協議会は、イトウを河川生態系の象徴として捉え、本種の保護活動を通じて、本種のみならず流域全体の多様な河川生態系の保全に寄与していきます。
3. イトウ保護連絡協議会は、各地域におけるイトウ保護活動を通じて、河川と地域社会との健全な関係を模索し、もって自然環境に配慮した、地域社会の健全な発展に寄与していきます。



イトウ保護連絡協議会は、道内の各イトウ生息地周辺でイトウ保護活動に取り組んでいる団体（市民グループ、漁協、商工会）同士が、情報交換と互いの後援を目的に2002年につくったネットワーク組織です。各団体の活動については、同協議会のウェブサイト<http://homepage3.nifty.com/huchen/itou-net/index.html>で詳しくご紹介しています。またこれら団体の参加によるイトウ保護フォーラムは2002年にニセコ町、2003年に南富良野町で開催され、今回は3回目です。

イトウ保護連絡協議会・参加団体（50音順、かっこ内は事務局所在地）

釧路自然保護協会（釧路市）／猿払村商工会青年部（猿払村）／斜里川を考える会（斜里町）／朱鞠内湖淡水漁業協同組合（幌加内町）／尻別川の未来を考えるオビラメの会（ニセコ町）／ソラプチ・イトウの会（南富良野町）／別寒辺牛川のイトウを守る会（釧路市）／別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会（厚岸町）

北海道イトウ保護フォーラム2004 インあつけし プログラム
発行 2004年11月21日

制作・著作 イトウ保護連絡協議会

<http://homepage3.nifty.com/huchen/itou-net/index.html>

(C)2004 Japanese Huchen Conservation Network, All rights reserved.